

この本は、雑誌『悲劇喜劇』（早川書房）に一九八七年十一月号から三回にわたって連載したエッセー『ロシアのサーカスルネッサンス——道化師ラザレンコとロシア・アヴァンギャルド』をもとに書きおろしたものである。本にするにあたり全体にわたって大幅に筆を入れ、とくに第三章と第四章は新たに書き加えた。

一九九〇年は、ラザレンコの生誕百周年、メイエルホリド没後五十年、マヤコフスキ没後六十年というように、この本に登場する主要人物を記念する年にあたっている。このような年に本書を出せることに、なにか因縁じみたものを感じている。

大学時代にメイエルホリドを中心としたロシア・アヴァンギャルドの芸術運動を調べていたときから、たしかにラザレンコは気になる存在であった。しかし、こうして本格的にラザレンコの生涯

を追うことになるとは、そのころは思いもよらなかつた。ラザレンコや彼と同時代のサーカス芸人のことを調べようと思いたつたのは、なによりもスラフスキイ氏の書いた伝記『ヴィターリイ・ラザレンコ』に出会ったおかげである。スラフスキイ氏のラザレンコ伝を読むうちに、諷刺を武器にアリーナに立ち、革命という激動する時代の渦にとびこんだ道化師ラザレンコの攻撃的な個性あふれる生き方に、わたしはいつのまにかすっかり魅了されていた。さらにはラザレンコの生涯を追うことで、サーカスからロシア・アヴァンギャルドの芸術運動を展望することが可能かもしれないと思うようになった。ラザレンコの生き方そのものが、時代と心中を余儀なくされたロシア・アヴァンギャルドの歴史そのものを語っているように思えたのだ。

大学を卒業後、外国のサーカスをプロモートする、いわゆる呼び屋の会社で働いていたわたしにとって、サーカスは身近な世界であった。サーカスの世界に少しずつひかれはじめていたときに、スラフスキイ氏の伝記と出会ったことが、ラザレンコへとわたしを駆りたてたのかもしれない。伝記を読みおわってから、革命期のサーカスがどういう状況にあったのかを知るために、当時のサーカスに関係する本を探し求め、アヴァンギャルド芸術家たちとサーカスとの接点を中心に演劇史をもう一度読み直す作業がはじまった。

しかし、日本でラザレンコを中心にサーカスとロシア・アヴァンギャルドの関わりあいを追うということには、おのずと限界があった。ラザレンコ自身について、また当時のサーカスをめぐる文化状況について、調べたいことが山ほどあるのに、関係資料を手に入れることができないのだ。行き詰まってやむなく、わたしはスラフスキイ氏にあてて、「あなたの本を読み、ラザレンコについ

て関心をもちはじめた。いろいろラザレンコについて調べたいことがあるのだが、協力してもらえないだろうか」というような内容の手紙を書いてみた。一か月ほどして氏から返事が来た。そこには、「喜んで協力しましょう。自分のもっている資料を全部貸してあげるから、とにかくモスクワに来なさい」と書いてあった。

こうしてわたしはスラフスキイ氏に会うために、一九八八年、翌八九年と二度モスクワを訪れることになる。このモスクワ訪問がなければ、本書は生まれなかったであろう。ラザレンコが一九一九年から自分の出会った人々にメッセージュを書いてもらったというアルバムや、ラザレンコの手書きの道化師論などは、スラフスキイ氏の手を離れ、国立中央図書館に所蔵されているため、実際手にとって見ることはできなかったが、ラザレンコについてスラフスキイ氏がとったメモ、ラザレンコの手紙や当時の雑誌など貴重な文献資料、写真などを提供してもらうことができた。

モスクワ郊外にあるスラフスキイ氏のアパートの書齋にとじこもり、段ボールに収められた写真や古い雑誌をひっきりかえしながら、食事をとるのも忘れ、ラザレンコやサーカスについて語りあったあのすばらしいひとときは、忘れることのできない思い出である。

ラザレンコを求めての二度にわたるモスクワへの旅は、また多くのサーカス・クレイジーたちとの出会いの場をつくってくれた。

スラフスキイ氏はもとより、そのスラフスキイ氏を紹介してくれたウラジミール・ドゥーロフの孫にあたるドゥーロフ動物劇場の総裁ナターリヤ・ドゥーロヴァ女史、タカシマをはじめとするソ連に渡った日本人芸人の貴重な写真を提供してくれたドゥーロフ動物劇場のカメラマン、ユーリ

ー・クージン、ターンチ兄弟の血筋を受け継ぐ元サーカス芸人アレクサンドル・フェローニ、サーカスやエストラーダの研究機関全ソ芸術研究所サーカス・エストラーダ科のメンバー、タカシマについての貴重な資料を貸してくれた、みずからも日本人のお祖父さんをもつ日系のサーカス芸人ゲオルギイ・イシヤマ。みんなサーカスを心から愛するすばらしい人たちであった。こうした人々との出会いは、この本を書くうえで一番の喜びであったし、わたしにとって貴重な財産だと思っている。

ラザレンコに出会い、この本を書き進めているとき、自分自身の生活にも大きな転機があった。九年間勤めていた会社を辞め、サーカスのプロデューサーとして独り歩きをはじめることになったのだ。サーカスを興行の世界だけにとじこめるのではなく、もっと広い視野にたつてサーカスをプロデューズしたいと考えたからである。この本を書きながら、わたしはいつのまにか、サーカスとともに生きていこうというひとつの決断をしてしまったようである。いままで文化史のなかで、ともすればエピソードとしてしかとりあげられなかったサーカスを軸に、文化を語っていききたい、その視点から自分の手でサーカスをプロデューズしていききたいと思っている。

一度そのなかに入った者は、永久に出られなくなるという〈魔法の輪〉——サーカスの円いアリーナ。もしかしたらわたしも、このアリーナの呪力に魅入られてしまったのかもしれない。

なによりも本書を、わたしのサーカスの先生、ルドルフ・スラフスキイ氏に捧げたい。

最後になってしまったが、わたしのエッセーを雑誌『悲劇喜劇』に紹介していただいた尾崎宏次先生、また、このエッセーに目をとめていただき、本にするために貴重な助言を与えてくださった

平凡社編集部 田邊道彦氏に心より感謝を申し上げます。

*

以上は、一九九〇年四月に本書が平凡社から刊行されたときの「あとがき」である。

復刊されるということで、二十三年ぶりに本書を読み返すことになったのだが、正直読む前、怖かった。処女作であるため、拙い表現が目について、がく然とするのではないかという不安もあったが、なにより心配だったのは、ラザレンコやアヴァンギャルド芸術家たちが共に生きた「革命」のことを、四半世紀の時間を経るなか、そしてそのあとの時代の変遷のなか、書いたときと同じように読めるだろうかということだった。この本が出た一九九〇年はペレストロイカの真っ最中、そして一年後、「革命」によって生まれたソ連は崩壊した。その後、ソ連を生み出したこの「革命」こそ、諸悪の根源であったという評価があたりまえのようになってしまった。「革命」という言葉のもつていた輝きはすでになく、ほぼ死語となったといっている。時代を描くことの宿命でもあるのだが、歴史の評価が一八〇度変わってしまったなかで、あのととき輝きをもって書いた「革命」が、その意義を失い、浮遊してしまっているのではという不安であった。

読み直してみても、拙い表現は目についたものの、「革命」は輝きを失っていなかった。ここで書いた「革命」はイデオロギーでも、政治理念でもなく、よりよきものをめざす、生き方を変える力だった。それは精神の革命まで求め、全力疾走で時代に立ち向かった若き芸術家の青春でもあった。

読み返してみても、この『サーカスと革命』が青春の書でもあったとあらためて思った。私にとっても処女作であり、自分の青春でもあった。

学生時代、故水野忠夫先生の授業を聞いて、ロシア・アヴァンギャルドという世界があることを知り、夢中になった。そして大学卒業後、偶然入った会社でソ連のサーカスと一緒に仕事をすることになった私にとって、故スラフスキイ先生が書いたラザレンコの評伝との出会いは、まさに運命であった。ロシア・アヴァンギャルドとサーカスを結びつけることを教えてもらったのだ。

青春の書なので、拙い表現は多々あったが、ほとんど訂正はせず、一九九〇年当時に出たままの状態で復刊させてもらった。ただカバー等は、他の私の単行本をデザインしてもらっている、フラグメントの西山孝司さんの装丁である。こんなに嬉しいことはない。

この本を書くなかで、サーカスを通じて学ぶ喜び、サーカスを知る愉しさを知ることができた。それがいままでサーカスを追い求めてきた源泉になっている。

「サーカス学」の最初の一步となったこの本を復刊できたことは、すべて水声社の皆さんのおかげである。最初に橋をかけてくれた木村妙子さん、そしてすぐに承諾してくれた鈴木宏社長、編集の小泉直哉さんに心より感謝申し上げます。

そしてこの本を、私にロシア・アヴァンギャルドのことを教えてくれた水野忠夫先生と、私のサーカスの父スラフスキイ氏に捧げます。

二〇一三年十月

大島幹雄